医療功労賞に山本さん

地域に根ざした訪問看護

安心与える仕事にやりがい

長年にわたって地域の医療や福祉に貢献した人をたたえる「第43回医療功労賞」（読売新聞社主催、厚生労働省、日本テレビ放送網後援、エーザイ協賛）の県受賞者に、徳山医師会訪問看護ステーション（周南市）の訪問看護師、山本香代子さん(55)が選ばれた。地域に根ざした活動を展開し、訪問看護への信頼感を醸成したことなどが高く評価された。（本岡辰章）

「訪問看護に携わる人が増えてほしい」と語る山本さん

「協力してくれる皆さんのおかげ」。山本さんは謙虚に受賞の喜びを語った。

周南市の徳山看護専門学校の定時制で5年間学んで正看護師となり、徳山医師会病院に勤務。結婚後約10年間は主婦業に専念した。子育てが落ち着いた1993年頃、同市の神田医院で再び働き始めた。

院長の指示で月に数軒、市北部の中山間地域に住む患者宅に出向き、点滴を打ったり、心音や血圧、脈を測ったりする訪問看護を始めた。「患者の生活を垣間見ることで、家族の負担の大きさや服薬の状況などを把握できた」という。

同院の訪問看護部門は99年、事業所「訪問看護ステーションぺんぎん」として独立。同院以外の患者も受け入れ、山本さんは管理者を任された。

「晩年を自宅で過ごしたい」と望む終末期医療患者や精神病患者、通院が難しい高齢者や子どもなど、患者の置かれた状況は様々で、医師、看護師、ケアマネジャー、介護士らとの情報共有は欠かせない。「患者さんの状態に合わせた最適な対応ができるように、関わる人のすべてが連携することが重要」と話す。

2011年1月、同院の院長が事故で急死。多くの患者の新たな主治医や、入院を希望した人の受け入れ先を探した。事業所は同4月から徳山医師会病院の傘下に入り、医師会訪問看護ステーションの市北部の出張所に。現在も出張所を拠点に、1日4、5軒の患者宅を訪れている。

「基本的に1人で訪問することや、緊急時には夜中でも出向くことなどをリスクと感じる看護師も多く、訪問看護師を志す人は少ない」。山本さんはそう語る一方で、「大変ですが、自宅で過ごす患者さんとその家族に安心を与えるのが訪問看護。やりがいのある仕事です」と訴えた。